

真生

第十卷 十月號

□ 靜に人生の一生を客觀すればたゞ此の世に生れ來て皆等しく死んで行くのみである。その中には色々の喜びや悲しみや、喜怒哀樂の生活もあり、和共鬭争の生活もあるが、生れては死に、生れては死ぬと云ふ外に、別に變つた何ものもない。

□ 或る人は之を大海の波に譬へ、人生の一生はたゞその波の一波にすぎない、生滅流轉、かくして永劫に人生はくりかへされて行くものである。乍然人生の一生は果してそんなものであらうか、私達は到底それでは満足のできないものである。

□ 波より波へ、波動して行く波の力を見よ、そこには永久に再びくりかへされない一種の力がある。此岸より彼岸へ、寸毫も現實を離れぬ波の力は永へに一つの方向を待つ。人生の力生んとする要求とその力とは單なる一つの波ではない。波より波へ、移り行く波の力はそこに一貫せる發展の文化が見ゆる。人類の文化はそれを織りなす人間の力ではないか。

□ 天地を貫く神人の生活、天地と共に人の心に浸み入つて行く佛の心、私達はそこに永遠なる生命と限りなき向上の世界が見ゆる。波の生滅は波そのものゝ生滅ではなく、寧ろ力の傳達に必然缺くべからざる一つの現象に過ぎないやうに、人の生滅も亦、人類文化の發展の一波動にすぎない。

□ だから一人の死が必しも萬人の死ではない。生死々々ときくりかへされるところに、それを通して大きく見ればそこにそれを通じて大きな文化があらはれてゐる。あらゆる歴史をさう見たとき、人生の社會的眞意義もあるではないか。社會と人生との價値の生活も見えるではないか。死は必ずしも悲しむべきものではない。(念)

反宗教運動に就て

□近頃各地に反宗教運動について心配する人が多いやうであります。私もそんなことを彼等がするかと思つて少しく調べたことがあります。乍然その結果は案外に心配する程でも無かつたのであります。

□何となれば彼等は宗教を以て阿片なりとし、又ブルジョアの先きだと云つて宗教を排撃しますが、それは所謂既成宗教の餘弊についてであつて、眞の宗教については全く觸るゝ所がないからであります。

□又彼等は唯物論を主張する點から無宗教無神論を主張するのであります。佛敎の如きは始めから無神論であつて、それも亦全く當らぬのであります。だが無神論即無宗教と云へるかどうか佛敎とキリスト敎とを一緒に見てゐるところに彼等の誤謬があります。

□否、それよりも私共の考へでは今のやうな既成宗教ならば寧ろ彼等によつて破壊される方がよいとさへ思ふ點が多いのであります。それは確に本當の佛敎を疎害してゐるからであります。

□本當の佛敎はその意味に於て、民衆の生活に一致し、民衆の爲めの宗教であり、民衆の爲めの運動であるからであります。如來の大慈も偏へに凡夫の爲めでした。釋尊の出世を誰が貴族や富豪の爲めの宗教と云ひませう。

□四民平等と云ふけれど、釋尊の佛敎は眞理を基とし、民衆を中心とするの無産の宗教です。此の意味から云へば今日の宗教はむしろ無産大衆と共に生くべき宗教の生活とならねばなりません。

□従つて此の意味から云へば今日の反宗教運動は一面既成宗教の餘弊を改善すると同時に新しき眞の宗教の出現を助くるものとも云つてよいのです。(念)

目次

宗教より生活へ	念
合掌の生活	土屋觀道
宗教と人生	土屋觀道 安田恢順
南支の旅(二)	土屋觀道
堤清六氏を悼む	土屋觀道
旅日記	土屋觀道

宗教よ生活へ

宗教の信仰は多くの場合、たゞ神を拜み佛を禮するのを以つて終るのが常でした。其の他餘程進んだと云ふ人下さへ、宗教を未來に置くのが普通であります。

乍然何の爲めに神を拜むのか、又何の爲めに佛を禮するかと云ふことを本當に考へたり、味つたりする人は少いやうであります。

此の意味に於て、從來の宗教は生活より宗教への宣傳でありまして、生活から生活への引さられたる人生を神佛の前に合掌せしむるのが多くの宗教でした。

乍然私、の今こゝに云はうとする宗教は宗教から生活への宗教であります。言換へればすべての生活が宗教を中心として此の土に現はれて來るの宗教であります。それは恰も軍隊が上官の命令に服して、今やその各自の任務を果すやうなものであります。

此の意味に於て、今日の私共の宗教は如來を中心として自己の使命を果すの宗教であります。それはまた旭日の昇るが如く、限りなき望みに充ちて自己の本務に全身を献ぐるの活動の生活であります。

だから私共の座禪念佛も決して單なる未來主義の座禪念佛ではありません。それは少しとも今日今日の只今より、如來を中心として眞實の生活に入るべき靈化運動に他なりません。従つて今日の宗教は生活を離れての宗教ではないのであります。況や宗教なき生活でないことは云ふまでもありません。(念)

合掌の生活

土屋 觀道

一、合掌の内容

- 若し合掌の字義から云へば合掌とは掌を合せることです。然にどんな時に合掌するかと云へば印度では自分より尊い人に向つて禮拜するときに用ゆる一つの方法であります。我が國でも神佛の前によく手を合せて拜むのであるのを見るのがそれでありませぬ。
- だから合掌と云つても單なる合掌でなくして、こゝでは所謂信仰上の合掌を云ふことはもとよりであります。尙形式から申せば金剛合掌とか何合掌とか色々の形式がありますが今はたゞ合掌そのものの心の生活を云ふのであります。佛敎で云ふ色々の合掌は要するに此の心の應用に過ぎませぬ。
- それでは合掌の精神とはどんなものか、こゝでは主として如來に南無するの心を言ふのであります。如來に南無すると云ふことは心から佛に歸依する生活であります。
- 南無とは佛に自己の一切を任かすることでありませぬ。佛に任せるとは自己のはからいを止めて一切を如來の御心のまゝに任かせることです。
- 或る人はそんなことができるものかと云ふ人があります。乍然眞に佛を信するものはやがて自分の

一切を佛に任かせて自己の計らいを入れなくするのが普通であります。それは一層はつきりとなるにつれて自分の生活がそれを中心として働くやうになるからであります。

二、歸命の一心

- 謂換へれば歸命の一心と云つてもよいのです。何となれば一體合掌と云ふことが歸命の心の外にならぬからであります。従つて合掌の生活とは如來に歸命し、その歸命した心で一切を生きて往く生活を云ふのであります。
- 如來は衆生を救ふ心の外に何もありません、だから如來の御相は一面から云へば大悲そのものと云つてもよいのです。
- だから如來を拜むと云ふことは其の慈悲を拜むのです。而して、その慈悲を拜むとはやがてその御佛の大慈悲に觸れることであり、又如來の御心はその拜む心を通じて衆生の心の上に現はれ給ふと云ふのが佛敎の敎です。
- 此の意味から言へば如來に合掌することは私共が如來の御相を通じて、如來の大悲に觸れることであり、如來の大悲はそれによつて私共の心に働くこと云ふことになりませぬ。之を入我々入と申しますが、即ち如來我に入り我如來に入ると云ふ神秘の生活がこゝに始まるのであります。
- 而も本當の合掌は此の入我々入の當體に自他不二となり、佛凡一體となるのであります、だから世の中に此の歸命合掌の生活ほど尊い生活はありません。

三、念佛と生活

□中にも念佛の生活はその最極を示すのであります。佛は最上究極の大覺者大慈悲者宇宙眞理の體現者であります。乍然、同じ佛でも此の世に現はれ給ふに於てその現はれ方に色々あるのであります。阿彌陀佛はその最も完全なるものであります。

□此の點に於て諸佛の中に阿彌陀佛ほど私共に因縁の深い佛はありませぬ、それは今日の佛典を拜讀すればその關係が一層明かとなるのであります。が阿彌陀佛は諸佛の中にも最尊第一の佛として衆生のすべての罪過をも救ふのであります。

□凡そ宗教に何が必要かと申しても、永生と向上ほど必要なものはありません。而も一切の衆生の罪過を許しいかなる愚かな者も悉く助け救ふと云ふ佛は此の佛の外にはないからであります。

□其の御相は相好圓滿に、智慧と慈悲とをたゞへて在します。現在説法の佛であります。而してその住みます、一世界は無爲涅槃の解脱の世界であります。そこに生ずるものは再び惡道に墮せず、三苦消滅して善心生活と云はれて居ります。

□而もかうした生活に入ることが私共の理想であり、そこに入る唯一の方法が念佛であります。

四、念佛の方法

□然はかくの如きの念佛はごうしたら充實するか、それはたゞ一心に佛の救を求めて稱名念佛すればよいのであります。それが如來大悲の本願であるからであります。

□如來を信じて「助け給へ」と合掌し念佛すればよいのであります、その中に一切の解脱は如來の方より與えられるのであります。だから念佛の充實はたゞ一心にするにあります、自己の計いを入れなぬ念佛たゞ助け玉への専修念佛の一行であります。

□何となれば念佛は合掌の念佛であり、歸命の念佛であるが故にその合掌の當體には佛凡一體の靈光が自ら輝き渡り自他不二の生活がそこに現はれて來るからであります。

□一つの噴水は其の源を水源から發して、又その水源に等しからんとするが如く、私共の生命も宇宙の本源から出で、その宇宙と等しからんとするものです、だから歸命と云ふことは小我の生命が宇宙の大生命に歸る相だと申しても差支へありません。

五、宗意と安心

□乍然かく申せば、それでは一心さへあれば何と拜んでもよいと思ふ人があるかも知れません。否、現に「鬮の頭も信心から」と云ふ人もあります。乍然之は宗教には信心がなくしてはならぬと云ふことを云つたもので信仰もなくてやたらに拜む人を戒めた言葉にすぎません。従つて之は宗教には信心が大切だと云ふことを云つたものだとして頂けばよいのです。

□乍然多くの場合、普通一般宗教には鬮の頭でも信ずると云ふやうな迷信の人もないわけではあります。此の意味に於て何でもかんでも信じさへすればよいと思ふが如きは全く外から見た迷信にすぎません。

□だから單に歸命合掌と云ふことをいかに強く云つたとして、其の人の信仰の内容が底級である限りその信仰の對象も亦底級なるをまぬがれぬものであります、従つてそこに宗意安心と云ふものが非常に大切なものとなるのであります。

六、宗教と生活

□従つて本當の合掌はたゞ一心に自ら信する御佛に合掌しさへすればよいと云ふのではありません、そこにはむしろ一切の自己を離れて釋尊の佛説に信順すると云ふことが大切となるのです、宇宙の眞理即ち宇宙大自來の生命と一になつた佛の心それが私共の信する宗教の生活であります。

□そこには佛と我が一つになります。我が佛に歸依することは私が佛の御心に従ふことです佛の止めしめ給ふところは之を止め、佛のなましめ給ふところは之をなす、それが私共の信仰であり生活でなくてはなりません。

□丁度月が出て月の光で道を歩くやうに如來の御光で如來の道を歩くのが所謂合掌の生活であります。(一九三二、一〇、三、於信州 戸倉)

宗教と人生(一)

土屋 觀道 述
安田 恢順 記

「これは昭和六年四月十四日より一週間岐阜縣城山行基寺に於ける別時念佛會の講話の筆記です。講話の全部ではもとよりありません。私が講話するのを安田師が其の要點と思ふところを略記せられたものです。道友の爲めにもと云ふので、私があつて二三加筆して、これにそれを發表することにしました。」

第一日 午前

思います。先づその序論として、

序論

第一 世間の誤解

之より宗教と人生と云ふ題の下に話を進めて行かうと

近頃の人にはあまりに宗教と云ふことに疎いやうであ

ります。昔からの歴史を見れば宗教の非常に盛んだつた時代もあり、又之に反して非常に衰えた時代もあります。従つて何れの時代も宗教が盛んであつたと云ふのではありませんが、乍然今日ほど、世に宗教の無視せられた時代はあまり多くありません。殊に多くの民衆に於て、宗教を否定し、あまつさへ、反宗教運動まで提起せらるゝと云ふが如きは歴史あつて以來、あまりないことであるります。

乍然それと云ふのも、宗教に對する多くの民衆が無智であると同時に、宗教と云ふものゝ中にも、あまりに多くの宗教ならざる宗教の餘弊が混入してゐるからでもありませう。而て現に此のことは少しく佛教の何ものたるかを研究するに至つて、特に今日の既成佛教の中に此のことの多いのを感じる次第であります。従つて今日の青年や有識階級の人々が今日の既成宗教に日々遠ざかりつゝあると云ふことは決して無理もないことでもあります。それに今一つは今までの宗教と云ふものが主として封建時代に成立した宗教であり、其の時代の思想、道徳に相應して完成せられた宗教だけに、今日の社會生活にそれが一致せぬと云ふことも大いにあつかつて力あるのであります。

此の意味から云へば明治の初年、王政復古と共に眞の

宗教も之に應じて改新せらるべきでありましたのに、宗教獨りが昔のまゝに取り残された感もありますが、又一方では西洋の文物を取り入れるに急にして、我が國古來の宗教を無視し、廢佛毀釋などと云つて、佛教の精神までも之を顧みなかつたと云ふが如きは多くの民衆に宗教の必要までも忘れさせたものがあります。従つて今日の民衆が多くの場合宗教を無視するやうになつた理由は一二にして留まらないと思ふのであります。

尤も近頃では所謂社會主義一派があらゆる方面に活動し、その結果共産黨事件などが勃發し、其の他無産運動などが臺頭して、世間の人心を寒からしむるものがあるもので、或る世間の一部では之は民心に宗教心がないからであるとして云ふので、自らも宗教の必要を感じ、又多くの民衆にも宗教の必要を説くものが多くなつて來ましたが、乍然それが果して本當の宗教を知つてゐるかは疑問であります。従つて此の意味に於ける本當の宗教は世間に未だ知られないものが多いのであります。

第二 宗教とは何か

然らば眞の宗教とはどんなものでせう。私たちは小さい時から本當の宗教と云ふものがどんなものであるかと云ふことを眞に聞いたこともなければ、又教はつたことも

ありませぬ。否それどころか宗教と云ふことについては寧ろ迷信でもあるかのやうな教へさへ、私共は學校で學んで来たのであります。而もさうした生活の間に直接間接に見聞するものは田舎に於ける神佛の参拜や、葬式法事などに接するのがせきの山で、宗教と云ふものは神佛を拜むことや、死んだ人の葬式や法事でもすることかと思つた位です。而も寺院に於ける僧侶の説教を聞けば主として此の世の不快なことや、死後の淨土の結構なことばかりで、私共の實際生活とは全く縁の遠いものであります。此の意味で學校の教育と宗教の生活とは全く相反したものであります。

然に多くの我々は最も此の世に愛着を持つものです。従つて、最も此の世に生き永らへ、此の世に發展したいと云ふのが其の望みであります。そこへ持つて来て、多くの寺院が無慾であれ、執着を去れとの説教し、其の上、死人の葬式や法事ばかりすると云ふことは全く人の嫌いなことばかりするものが宗教であり、僧侶であるかの如く思はれたのも無理からぬことであります。而も亦かうしたことが多くの人々に宗教を誤解せしめた重大な一つの原因でありませう。そしてまた、かうしたことを今も尙多くの寺院がやつてゐるのであります。

然らば眞實の宗教とはいかなるものでありませうか、

離れ、生死の境をも自ら超ゆると云ふことになるのであります。

乍然、此のことは一朝一夕にして達せらるべきことではありませぬ。例へば私共が餓えたとき自然に食を求むるのは何等の理窟もないのであります。何が故に食ふのか、ひもじいから食ふのである。之が最も正しい生理的事實でありませう。「食いたいから食ふのである」と之が私共の偽りのない心理的事實でありませう。乍然、私共の考へが段々と深くなれば饑じいから食ふとか、食いたいから食ふと云ふだけでは満足ができなくなり、何故に腹がへれば饑しくなり、何故に食いたいから食ふのであらうか、そこには何か目的があるのではなからうか、人は何故に生れたか、たゞ食つて行く爲めの人生ではなからう、食ふ外に何か本當の人生があるではないか、若しあるとすればそれは何であらうか、そして我々が食ふと云ふとは寧ろさうした仕事を果さんが爲めではないか。否それであつてこそ、我々もそこに食いがいがあり、又生きがいがあり、働きのいがあるものだとか考へて来るに至るものであります。若しさうでないならば人生の一生ほどあぢきないものはありますまい。それはたゞありのままの生活であり、又一面から云へばその日ぐらしの生活であり、又單なる引ずられたる生活にすぎぬものとな

それは主として、眞實の自己をして、眞に生かしむるの教へであります。便宜の爲めに其の大綱を示せば、

一に目的。一面から云へば人が餓えて食を求むるやうに、宗教も亦、人間に於ける或る場合の自然の要求であると云つてもよいのであります。乍然之を食物の方から云へば人の餓には食なくてはすまないやうに、人類の生活の生活として、永遠の生命と無限の向上とを要求するものは此の宗教がなくては眞の生活ができぬのであります。

此の意味に於て、眞の宗教は私共に對して、永遠の生命と無限の向上とを與えるものと云つてもよい。否、言ひ換えれば私共の永生と無限の向上とが要求するものが即ち宗教であつたのであります。されば宗教とは私共に永生と向上とを與えるものであり、それに徹するものは自ら永生と向上とを得たものと云はねばなりません。従つて、佛教で云ふ佛陀とは即ち此の永生と向上との完全者と云ふことになります。此の意味に於て、佛陀とは人類の最上要求たる不死の自覺と人格の完成者を云ふのであつて、所謂今日の最高人格者を顯はすものであります。従つてまた、宗教の目的とは一切の人類をして、此の佛陀の如き最高人格者たらしむものであると云つてもよいのであります。従つてそこには自ら此の世の執着も

り、人生の望みも喜びも力もないものとなつて終ぶのであります。こゝに於て、私共の生活はかうした引ずられた生活から逃れ、望みと喜びと力に満つた生活を發見すべく、永遠の生命と無限の向上とをあこがるゝに至るのであります。そこには人生の若難も恐れず、死も辨辭せない、輝きの生活に私共を生かすものがあるのであります。而てそれをこそ人生の意義とも云い、又人としての眞の生き涯いとも云ふのであります。

此の意味から云へば私共が死を恐れると云ふことはまだ本當の生活に充實してゐないからであります。従つて生活さへ充實してゐるならば死は決して恐るべきものではないと云ふべきです。此の意味に於て、私共が死を恐るの亦一面には本當の仕事が仕たいからとも云へます。何とならばうかつに自己の死を早めては本當の自己の本分が盡されないのであると云へます。

然らば本當の仕事もせず、かと云つて、いつまでもたゞ死にたくないと云ふばかりの人にはどんなものでせう。それこそ全く生き涯いのないものと云ふべきであります。

かくて眞實の宗教は肉體の死よりも精神の死を恐れ、單なる永生と云ふよりも、價値の生活を要求するに至るものであります。而てそれを充たすものが即ち釋尊の佛

教でありました。

二、本尊。本尊と云ふのは自分の歸依する信仰の對象を云ふのであります。多くの場合、一つの目的を達するには之を達する方法がある。其の中でも宗教に限つて必ず本尊と云ふものがあるのであります。之は自己の目的を達する究極の眞理と云ふ立場から云へば眞理の外に依る處はないから、眞理を一つの理想とすれば法がそのまゝ本尊となります。乍然その法も理法と事法とありまして、理法を主とすれば法本尊となり、事法を主とすれば人本尊となります。言かえれば合掌の對象とするもの、即ち歸依の中心となるものであります。故に法本尊と云ふ場合には一切の諸佛が佛としてありうる法そのものを云ふのであります。一切の諸佛も此の法に依らなくては佛たることのできないと云ふ法そのものを云ふのであります。而て人本尊と云ふのは其の法を具現せる佛陀その人を云ふのであります。そこには一人格の佛の上には佛としての法を全顯してゐる如來様を云ふのであります。普通一般に云ふ宗教の本尊とは此の人格神を云ふのであります。こゝで云ふ私の本尊とは大無量壽經に現はれたる阿彌陀佛のことで、私共の歸依する信仰の對象を云ふのであります。即ち自己の身も心も御任せすることのできるものであります。多くの信者は子供の時から教

へ慣らされて自然と心に得てゐるけれどもそれは多くの場合、一種の概念であり、宗教の模倣であります。今私の云ふところの本尊と云ふのは此の假りのものを離れた、眞實の佛そのものを云ふのであります。宇宙最尊の絶對者を云ふのであります。従つて此の絶對者に對する信仰が確立して來ると、自己の心が之を中心として働くこと云ふことになるから、何事に對しても決して不安動搖の心が起きて來ないのであります。故に宗教の中では此の本尊の確立と云ふことが最も重大なる一要素をなすのであります。

三、方法。方法と云ふのはその宗教の目的を達する方法であります。如何なる宗教にも此の方法のないものはありません。方法がなくては其の目的を達することができないからであります。彼の佛教で云ふところの觀法、座禪、念佛の如きは悉く此の方法の中に入るものであります。祚りとか斷食とか、水こりとか色々其の民間に行はれてる宗教の行事も亦此の方法の中に入るべきでせう。

乍然こゝに私共の最も注意せなければならぬのはいかなる宗教が其の目的に於て最も勝れ、本尊に於て尊く、方法に於て簡易であるかと云ふことであります。世には宗教でさへあれば何でもよいかの如く考へ、何の宗

教でも皆同じかの如く考へてゐる人もありますが之は大なる誤りであります。そこには求むる人や説く人によつて、宗教にも色々な宗教があつて、其の目的の上にも色々なの高下があるからであります。而も亦、その目的のみが同じであつても、之を達する方法に至つて更に千差萬別があるのでありますから、私共の宗教に於ては最高の價值即ち人生の眞意義を最もたやすく(容易)即ち最

も簡單なる方法によつて、誰でも得られる(即ち普遍的)ものと云ふことにならるのであります。

乍然、かゝる宗教も未だ人智の發達しない社會にはいかに努力しても之をその國に勧むることができません。何となればいかに努力しても、その國の人民未だ之を聞くに堪えないからであります。所謂馬耳東風とは此のことでありませう。(一九三二、一〇、二二、再校)續く。

南支の旅(二)

土屋觀道

五、神戸出帆

□八月三日正午に神戸出帆と云ふので私は二日の夜行で神谷氏と共に東京を立ちました。尼崎の圓平寺さんも同車でした。三等寢臺です。神戸の三の宮で藤村様に迎へられ、一緒に神戸驛で下車して名古屋の崇徳寺様、尾上様、伊藤様と一つになりました。崇徳寺様と尾上様とは名古屋からわざわざ御見送り下さつたのでした。

□アメリカ丸は第四突堤に私共を待つてゐるのでした。

新飼、渡部、岩下、谷口同志もやがて來られ、渡部様の奥様、中野靜子様の子、芦屋の藤村(章)様なども御見送りを頂きました。愈々出帆と云ふ前には記念の寫眞も撮り、テープなども張りまして、全く外國行きのやうな氣分を催しました。

□船中は全く一家族の様な氣分となり、特に私共は道友七名の水入らずが一團となつてゐるので全く力強いものでした。船が出たのは丁度豫定通りの正午でしたが、瀬戸の内海は晝間のこととて夕方近くまでその風光の絶佳

ななることを賞することができました。

六、門司出發

□翌朝八時頃門司に着きました。私の郷里九州と云ふので何となく懐しい氣もちがしました。十時頃愈々門司も出發、愈々玄海灘も横切つて臺灣に向ふことになりました。一同は皆元氣です。船中は全く熱さを知らず、丸で避暑の感であります。五日は早朝船上に出ますともう渡部様なども出てゐられました。色々信仰の話などする側鯨の潮吹くなど幾つとなく見られました。之は五島沖だと云ふのですが、さすがに五島近くには鯨が多いものと思へます。

七、基隆着

□基隆に着いたのは六日の午後十二時半でした。臺灣が見えたと云い出してから二三時間もしたかと思ふ頃、船は港内に碇を下したのでした。船上から基隆の町を眺むると全く内地と異つた氣分が一パイであります。山の形や草木の色までが非常に濃厚な色彩で色どられ、町の構造や土人の出迎えなどが内地と趣きを異にして居りました。

□人の眼を射るやうな強い太陽の光や、酷暑を示すやう

なその暑さ、急に熱帯はこんなところかと思はせるものも珍らしい感じの一つです。愈々上陸となつたので先づ商船の支店に休憩し、それから自動車を備ふて市中を一巡したのです。

八、臺北へ

□三時の汽車で臺北へ立ち一時間許りで臺北へ着きました。汽車の窓から田舎の田畑を見ましたが稲などは已に第二回目の植付などするのが見られました。停車場に着けば自動車が待つて居り直に便乗して、臺灣神社に参拜神社は淡水河の沿岸にある小高い山上非常に見晴のよい所にあります。北白川宮殿下を祭つてある。

□それから淡水河にかゝつておる臺北橋を渡つて、市の郊外に遊び、引返して北投の温泉に二泊しました。此の地は臺北を去る二三里山間幽邃の地であります。船中長途の疲れを休めるには全く理想の天地です。見慣れぬ熱帯の植物なども到るところに繁つてゐて一しほ心を慰むるものがありました。

□七日は主として臺北市内の見物でした。龍山寺、博物館、第一公學校、植物園、商品陳列館、總督府官舎など參觀、午後は晝食後自由行動となりました。目を引くものは主として熱帯の植物、並に土人の風族でした。公學

校の教育の如き全々日本語で土人に教へてゐるのですがあまりにも形式的なのに少々いや氣がさしました。

□龍山寺は一寸美しい寺でした、仲々に賑つてゐるが東京で云へば淺草の觀音様見たやうな所です。人出の多い、野臺店のあるところなど全く淺草そのまゝでした。博物館その他、總督など何れも立派な建物ばかり、日本民衆の貧弱なのにこゝばかりは實に堂々たるものでした。

□淡水港。私共は六人で淡水港行きをやりました。自動車で五十分の行程です。純本島人の街として全く日本離れのした町でした。家の造りから土人の服装、言語一として日本人と云ふ姿はありません。臺北から十三哩の河口にある風光絶佳の要港でした。美しいと云ふ點では淡水の町よりも此の淡水港に至る北臺までの途中でした。到るところ皆畫にでもなりさうな所です。

九、臺南及び高雄

□臺南は本島の舊都、臺南州廳の所在地です。臺北から二百哩餘、昨夜の十時に臺北を立つたのが今朝の七時に着いたのです。車中で朝食をしたが、今日は朝から熱さうでした。

□一同は紅白の二班に分れ、私共は紅班で安平へ蘭人の

築いたと云ふゼーランヂヤ城跡を視、引返して開山神社、孔子廟、臺南公園を抜けて商品陳列所、赤嵌樓から臺南神社へ出で、公會堂で晝食をとりました。

□開山神社は鄭成功を祭つた社です。氏は安南石井の人鄭芝龍の子、肥前平戸の田川氏の女と婚して出來たものだと言はれてゐます。寛永の頃、明が清に破れたので逃れて此の地に來り、蘭人を破つて自ら此の土の王となつた人だと云います。

□孔子廟は鄭成功の臣によつて建てられたもの、清の時代に改築せられたものと云はれますがその周圍には色々な堂祠があつて、所謂支那の孔子廟がいかなるものかと云ふことを充分に知ることができました。

□公會堂での晝食は州廳からのもてなしや、市側の響應もあつて氣持ちのよいものでありました。

□臺南から高雄へ着いたのは午後の二時でした。高雄は立派な港でした。將來は更に立派なものとなりませう。二班の中、私共は先づ築港をランチで見物し、それから入れ代りに自動車で高雄神社に詣で、山の中腹までも自動車走らせての眺望を逞ふました。

一〇、臺灣を去るに望んで

□午後五時、私共は愈々臺灣を去るになりました。之

から船は一路香港に向ふのです。懐かしき臺灣よ！彼女は其の一行を歡こび迎えて、今また靜に之を送るものやうでした。永い間、どんな所かと色々の好奇心を以つて見られてゐた臺灣は今私共に二日の旅を自由に開放して、その懐しさを一層に深めてくれました。

□臺灣は熱い所、マラリヤ等のはやる所と云ふやうな怖さは今悉く取り去られて、産物の豊かな所、果物に恵まれた天地、割合に住みよいところとして、私共に限りない愛着を残した國であります。到る所に日本人も多いのでこへ行つても言葉や買物に事缺ぐと云ふやうな感じもしませんでした。

□町と云ふ町も立派な町ばかりです。未だ本當の田舎や、土人の村には入らない私共にはさうした所の模様が一つも判らないのでありますが、それらは反つて今度臺灣に来て見たいと云ふ感じを残すものでした。

(一九三二、一〇、一三、追記)

堤清六氏を悼む

土屋 觀道

我が道友堤清六氏は去月十二日突如として他界されました。まことに哀悼に堪えません。十四日の御通夜に靈

前に詣で微意を微べましたが思へば一切が夢のやうでした。古人が此の世を假りの世と云い、夢の世の中と申し

ましたが氏の如き普斷健康の人にして此の事あるは全くその通りであります。

氏は新潟縣三條の人、多年日露魚業に關係し、カムチヤツカ方面の開発の中心人物として、其の名を世界に馳せた人です。其の性豪放純直にして加ふるに信仰の人でした。大正五六年初めて氏は信仰を中心として、私と交友の道を開いたのでした、たが常に純信の人として私の敬服する人でした。大正九年の財界の危期を氏が逸れたのも全く信仰の力だと聞いて居ります。

其の前後、東京神田の駿河臺に光明教壇を創設して私共の傳道を助けられたのも全くその信念の現れでした。その他、増上寺への献金、函館稱名寺の再建、郷里菩提

寺の總代、其の他あらゆる事業中心に信仰の力が働いてゐたことは私がよく知るところでありました。

晩年、大資本の魔手に倒れ、賣動事件に引きかゝられた事はかへすがへすも同情に堪えないところでありましたが、恐らくは氏の純直豪正の信仰の人たることを疑ふ人はありません。年齢漸く五十三才、愈之からと云ふところに突然病魔の襲ふところとなつたこと惜みてもなほ餘りあるところであります。

それにしても、氏は信仰の人深き念佛の信者でありました。私はたゞそれ一としても氏の永久の勝利を記念せずにはゐられません。謹んで道友と共に哀悼の意を表するものであります。

旅日記

(九、十月)

土屋 觀道

一、世相苦

□支那から歸つた私は一家のことで可なり苦しみました。一切を忍ぶと云ふこと

は佛の教へに聞くけれど、正しき道まで忍んで惡道に隨へると云ふことではない。乍然單なる机上の空論でなくして、利害を伴ふ實際の生活には、これまで忍ぶが本當かは可なりに苦しい問題でした。

□先方の云ふまゝを本當と信すれば先方の言ふことが初めから偽りであつたとき、それなしも本當と爲すべきか、嘘を嘘だとはれつければ先方はそれを幸いにやけに出る。やけを恐るゝではないけれど、それでは永久に解決がない場合、法律の力も及ばぬを此の上もない所得とてがんばるゝところ、全く正直なもの、亡びる今日の世相であります。

□此の意味から云へば「正しきもの先づ亡ぶ」と云ふのが今日の世相であります。上も下も之では全く此の世がやり切れないがそこをどうして切り抜けて行くか々今日の實際問題でせう。昔も下尅上と云つて、下が上に尅と云ふやうなことがあつたこと云ふのですが、丁度今日の實際社會がそのやうな感じがします。

□押の強い我ま、者、義理と人情と踏みつぶして、暴言と暴力とを以つて、一切の道徳を無視するものが先づ勝つと云つたやうな有様です。さうすれば結局は戦いでせうか。

□その戦いにも正邪の戦がありません。同じ倒れるなら戦つて倒れやう。それも正義の戦ひに此の身を献げるのがせめてもの生き涯いです。私の今日は遂に戦ひを是認しました。それも正しき人道の復活の爲めに、あくまで戦つて戦い抜き云ふ心になりました。

二、盲腸炎

□九月の九日に突然腹痛を覚え、翌日醫

師を迎ゆれば盲腸炎と云ふのです。一日の絶食と床の中の安静です。かくて十四日まで重湯とおかゆでした。十二、十三の和歌山の集りには中止、十五日は先約の爲め特急で大阪へまゐりました。前日まで水で冷してゐたのですがどうやら痛みだけは止つたやうで。用心のみは一層につけて居りました。多くの人々に迷惑をかけるかと思へば先約だけは何かして果したい爲めでした。

□でもかうしたとき、どの點までを押しに行くべきか今こゝで道に倒れると云ふことは二十年來の努力も水泡に歸すことであり、自分の妻子も亦路頭に迷ふことであると思ひげでできるだけの病氣の保養こそ第一だとも思ひますが、要は程度の問題です。病氣だ病氣だと云ふならば永久に佛道の期會もないからです。

□それにしても、かうして病苦に身心が疲れたときは佛道の元氣も自然に劣り、活動の力も自ら衰えて、普段の健康を思はずには居れませんでした。「健康は人生の最大幸福なり」と云つたショウベンハールエルの言も成る程と思はずにはあ

れません。健康であつての活動ださつくくそのことを思はせられました。

三、阪神地方

□十五日は尼ヶ崎の圓平寺、十六日は大阪の鹽田様、十七日は神戸の極樂寺、何れも支那旅行の御話して持ち切りでした十八日は大阪の春屋様、其の他に晝は芦屋の藤村様、申野様、大阪の中辻様等の訪問でした。道友の集りほど嬉しいことはありません。

□十九日は津の婦人會、二十は四日市、二十一日は桑名、二十二日は岐阜、二十三日は名古屋で下車し、急いで汽車に乗つたら、關西線と違へて居りました。何ぞしたへまなことをしたのか身心の疲れの爲めかまほしく弱り切つたことでした。

□それでも各地で此の上もない待遇を受けて支那の語で賑つたことは私としても此の上もない喜びでした。

す。二ヶ所とも相當の集りです。二十六日は焼津にあつて、ありましたが、朝から別時念佛で終日やりたひの道志の願がその爲めに一般に廣告してなかつたのを幸い、盲腸の爲めに休ませて頂きました。あこの先約が尙月末にかけて續か

らでした。□さうなるさ一刻でも早く歸りたいのです。一日でも早く歸つて休養せればと思つたからでした。草薙の御灸がよいと聞きましたが歸心矢の如しと申しませうか、たゞわけもなく急いで歸京いたしました。二十七八日とできる丈け床に就て静養をしたのです。

四、驛員講話

□八月二十九日から十月の六日まで、鐵道講話を頼まれてゐたので、二十八日はその約を果すべく、夜行で信州村井へ立ちました。之は鐵道共教會の催しです。

□二十九日は村井と校本の兩驛でした。初めてのことではあるが集る驛員が皆青

年の爲め話す私も元氣になれました。夜は淺間の温泉に宿りました。眺めのよい非常に静なところでした。不景氣の爲めに殆ど來客もないやうでした此の夜山陽の佛記に讀みふけりました。

□三十日は松本、明科、田澤の三ヶ所でした。宿は戸倉の温泉です。此の方面に至る所に温泉が多いのです。同費用で宿るなら閑静な温泉に越したことはないと思つたから成可く温泉宿に宿ることにしたのです。

□十月の一日は姨捨、稻荷山、西條の三驛でした。姨捨では色々お世話になりました。非常に眺望のよい所です。田毎の月も此の邊です。此の日は明日の都合で長野の驛前に宿りました。

□二日は長野、篠井、屋代の三驛と更に長野の工場との四ヶ所でした。殆ど終日急かしくて朝の七時半から午後の四時頃までを要したわけですが。宿は戸倉の豫定だつたのでしたが、少しは違ふ方がよからうと勧められて、急に上田町在の別所温泉に定めました。こゝも又非常に景色のよいところです。

□三日は麻績と坂北の二驛でした。別所からこゝまで約四時間半も要しましたが、それに二驛とも講話の時間が短かつたので全く失望しました。せめて三十分位なりとも思ひましたが残念でした。一日を費して二驛で僅に四五十分、それでも講話の後では二驛とも氣持ちよくなりました。宿は戸倉の温泉です。

五、柏崎の集り

□四日は吉田、豊野、年禮の三驛でした。夜は今日から三日間柏崎に行くことにしました。毎年の秋の集りを之ですまさうと思つたからです。此の日の夜は渡邊様の御二階の集りで、道友だけの會合でした。やはり道友の集りはなつかしいものです。

□五日は藤野田と高田の二驛です。高田では一寸町を見物する期會を得ました。來迎寺を訪れる時間が無かつたのは残念でした。夜は柏崎の浄土寺です。「南支に旅して」と題しました集る者二百名。

□六日は田口、關山、新井の三驛です。

鐵道の講話は之で一先づ終つたのでした。先約を無意味にしたことは病中の私としては何よりの喜びでした。夜は柏崎の浄土寺です。演題は「帝國の將來」でし

た。目下の滿蒙事件と帝國の關係を述べ日本國民の大覺悟を促したつもりであります。集る者三百名はありましたらう。

誌代拂込者並寄贈者御芳名

○壹圓宛△岐阜伊藤友太郎様 河瀬音吉様 林重太郎様 尾關栗洞様 伊藤孫左工門様 松浦重三様 伊藤源三様 山口源三様 山村鑄二様 栗野準一様 △三重安田作藏様 松井茂吉様 △東京林千代様 小野勇様 山井英一様 天正次郎様 △大阪鳴川義徳様 青尾龜次郎様 高橋きゆふ様 △柏崎柴野基次郎様 種岡いさ様 △愛知有賀善吉様 高木齊二様 太田春明様 岩月様 △上諏訪安藤百重様 武居やす様 今井三重様 △滿州營口水野連道様 △臺北新館謙次郎様 △新潟小林良平様 △鹿児島柳元ハル様 △名古屋崎うめ様 △静岡鶴谷俊了様 △浦賀伊藤いく様 長安寺様 正義寺様 小川廣雄様 ○壹圓五拾錢△大阪古座谷武兵衛様 ○貳圓宛△大垣滿岡せい様 △柏崎後藤寅三郎様 會田延様 岩下祥兒様 △上諏訪山田たけ様 △浦賀黒岡仁太郎様 石井庄太郎様 長島きり様 黒岡仁太郎様 △岐阜片桐照子様 辻儀作様 辻高様 伏見儀七様 圓心寺様 △二重山里秀隨様 五井隆様 △廣島田中直一様 △滋賀金剛義光様 △大阪江岡清一郎様 清水恒三郎様 △東京山田海應様 八木信剛様 谷口謙雄様 △福岡西方寺様 △新潟遠藤ふじ枝様 △關東州福原泰作様 △島根佐々木鶴代様 ○貳圓五拾錢二回 △和歌山法蓮寺様 ○參圓宛△佐世保富田トシ様 △三重坂倉一雄様 △上諏訪竹原久雄様 田中行雄様 松尾明三郎様 △福岡井上清次郎様 △尼ヶ崎橋本信吉様 △大阪神谷學周様 △新潟西照寺様 △鹿児島林彦兵衛様 △静岡關秀子様 △名古屋西脇賢吾様 ○四圓 △大阪原田恭藏様 ○五圓宛△大垣澤田しん様 △三重五井こよ様 △和歌山法蓮寺様 二回 △長野兼子達門様 △奈良岡崎良吉様 △名古屋崇徳寺様 堀營二様 △神戸藤村よね様 △堺松浦卯之助様 ○七圓 △福岡武田哲哉様 ○九圓 △神戸鶴田昌造様 ○拾圓宛 三重眞生製陶所様 △神戸關浦恒子様 △名古屋渡部善兵衛様 ○貳拾圓 △燒津光心寺様 ○五拾圓 △柏崎原吉郎様 ○四拾錢 △三重村木伊右工門様 ○拾八圓貳拾錢 △大阪曾我尾昌治様 扱

(大正十四年八月十三日) 昭和六年十月廿三日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十卷第九號
 第三種郵便物認可 昭和六年十月廿五日發行

價定誌本
一部 金 十 錢 郵税共
半年 金 六 十 錢 同
一ヶ年 金 一 圓 同

注 文 注 意
 謹讀希望者は代金を添へて御申込下さい。
 誌代は總て前金御拂込の事
 送金は振替によるのが便利
 です。

昭和六年十月廿三日印刷納本
 昭和六年十月廿五日發行
 東京市芝區芝公園十四號地九番
 發行兼 編輯人 土屋 觀道
 東京市外濠谷町中通二ノ四二
 印刷人 副島 愼夫
 東京市外濠谷町中通二ノ四二
 印刷所 丹丘舎印刷所
 電話青山七五一番
 東京市芝區芝公園十四號地九番
 發行所 眞生社
 振替口座東京四七二八八番